

キャラクター名

プレイヤー名

鳴上 良護（なるかみ りょうご）

シンドローム	ブラックドッグ		ワークス	UGNエージェントA	カヴァー	高校生
	キュマイラ					
オプショナル			年齢	18（19）	性別	男
覚醒	憤怒	衝動	破壊		初期侵食率	33%
出自	姉妹	経験	約束		邂逅	いいひと

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	39
肉体	5	1	3			9	行動値	3
感覚	1	0	0			1	(非装備時)	3
精神	1	0	0			1	戦闘移動	8
社会	1	0	0			1	全力移動	16

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	5		射撃			R C	1		交渉		
回避	2		知覚			意志			調達	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
③④	白兵	12r+5				導雷の裂戟（どうらいのれつげき）
③④⑤	白兵	11r+5		+10		轟雷の殿戟（こうらいのおうげき）/80↑/1シナリオLv回

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品		合計装甲：	0	合計回避：	0
コネ：UGN幹部		ロイス			
コネ：噂好きの友人					
		対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス消費
		氷室悟	P 誠意	N 憤懣	
		姉	P 憧憬	N 劣等感	
		旧友	P 友情	N 悔悟	
		バイク	P 信頼	N 脅威	
			P	N	
			P	N	
			P	N	
		最大財産P: 4 残り財産P：			

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
破壊の爪	4	3	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果：〈白兵〉攻撃+[LV+8]/命中0/ガード1								
ハンティングスタイル	1	1	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果：戦闘移動/離脱可/接触干涉封鎖不可/1シーンにLv回								
コンセントレイト：ブラックドッグ	2	2	メジャー	-	-	-	-	
効果：CL値-LV								
アームズリンク	3	2	メジャー	武器	-	対決	-	
効果：〈白兵〉ダイス+LV個								
MAXボルテージ	2	4	メジャー	-	-	対決	80↑	
効果：攻撃力+10/↑のダイス-1/1シナリオにlv回								
人間発電機	1	-	メジャー	至近	単体	自動	-	
効果：通電していない機械を動かす際〈RC〉判定を入れても可（俺は充電機じゃねぇつつてんだ）								
猫の瞳	1	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果：暗いところがよく見える。〈知覚〉判定を入れても可								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

一人称□オレ 二人称□テメェ、お前、アンタ

高校三年生男児。中学三年生まではどちらかといえば隔てなく人と接する性格であったが、半ばで起こった事件（覚醒）の出来事から徐々に素行が悪くなってぐれてしまった。高校は中学時代の自身を知らない人々の多い場所に入学したがその態度は特段変わらず人との交流を避け、自棄になって一年を無為に過ごし、留年した。UGNでの活動も単独を好んでいた。しかし、入学してきた彼と出逢ったことにより喧騒は幕をあげ、時間はふたたび動き出すことになる。

現在は言動がよろしくないが、根の性格のせいで悪くなりきれないためなんやかんや人が困っている姿を見かけると手を出してしまうこともしばしば。当然ながら酒もタバコもやってない。（タバコはやろうとして死ぬほど嗜せたり姉にバシて死ぬほど怒られた）たまに料理の手伝いをしているのでやろうと思えば料理ができる。動物が好きだがどうしたらいいかわからなくなる勢。

誕生日3月12日

参加シナリオ

19/06/23『さよならを君と』生還。経験点18

-----覚醒-----
当時の友人（女子）が上級生に目をつけられ、助けに向かうも力及ばず。友人が甚振られそう（広義）になったところで覚醒。相手は一般人であったが力の使い方もわからず半殺しにした。その手を友人へ差し伸べたが、その様に恐怖され拒絶された。そうでなくても、血濡れた電気を纏う異形に人が触れられるはずもなかった。